

災害ボランティアネットワーク通信

2015年夏

NPO法人

災害ボランティアネットワーク

茨城県古河市水海道三〇五

Tel 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigai-volunteer.net/>

2011年3月11日、大多数の犠牲者と甚大な被害をもたらした東日本大震災から5年目をむかえました。

多くの方々の尽力によって、少しずつ復興は進んでいますが、今だ多くの方々が仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。海で生きていた方々の高台移転はまだまだ時間がかかり、復興というには程遠い状況です。



被災された方々は大切な人や、ものを多く失いました。家族・故郷・友人・学校、それまで暮らしてきた場や大切なものを失った喪失感。人それぞれ大切なものは違いますが、痛感しています。

海や大地と共に生きてきた方々にとって失われたものの大きさは量り知れません。海から遠く離れた仮設住宅での生活は、

海が見られない風景を失った現実も喪失体験です。そうした大切なものを失った「喪失体験」に耳をかたむける事が今後ますます必要とされています。

福島第一原発事故による災害は未だ進行中で、放射能の影響を受けながら生活を余儀なくされている人達がいまいます。故郷に戻るのか、子供たちや妊婦にとって安全なのか、将来には影響ないの

か、福島の方々は常に先の見えないう不安の中での生活を余儀なくされています。

福島から避難された方々、残って生活をせざるを得ない方々、事情は人それぞれで、地域・学校・職場・家族の関係も様々です。そのなかで同じ人間同士で分断が起きています。



袋詰めして積み上げられた汚染土（福島県飯館村付近）

身近で顔見知り名前も知っている人同士の分断。原発事故は故郷を奪い、暴力的に人間関係を破壊してしまいました。そして事故の影響により、精神的病にかかり病気になる方々があとを絶ちません。また、格差社会により安い賃金で働かされている、下請け原発作業員は、被曝の脅威にさらされています。さらに自然界においては生態系が変わってしまいました。

テレビやパソコン等で情報の収集が簡単にできるようになりましたが、そこに書かれていることは、誤った情報が多すぎます。放射能の影響はありません。

帰宅して暮らしても大丈夫です。原発から海には何も漏れていません。こういった嘘の情報が震災以降、流されています。メディアを通じてしか見ない方々は、自然騙されます。

今後も、現地行つてこの目で確かめ、苦しみや悲しみに耳をかたむけ、本当の現状、人々の声をこれからも聴き続けていきたいと思ひます。

南三陸町 語り部」の証言

2014年10月14日 私たちは宮城県・岩手県の各地を視察し、様々なことを再確認しました。

あの日から3年の月日が経過し、人も建物も、その傷跡を癒しつつあるように見えました。

しかしそこには、どうしてもぬぐいきれない、大きな傷跡が残っていました。

その声にならない痛みを伝えるもの―それは、語り部の皆さんのお話でした。

戸倉小学校

志津川湾より、約18メートル離れた場所にあった小学校では、2011年3月12日は卒業式の為、前日震災当日は父兄、先生、生徒が準備をしていました。

そこに地震が発生し、学校屋上へ避難しようとしたが、昔からの言い伝えで、中へ逃げろを守り山へ避難し、全員がたすかりました。



「戸倉中学校」にて、語り部のお話を聞く。
小学校の時刻は、あの日のことを決して忘れまいと、地震の発生した時刻「午後2時49分」を指し続けている。

しかし山へ避難した子供たちは、また家にはおじいちゃんおばあちゃんが残っていたり、幼い弟や妹が家に残されたまま、津波に流されてしまいました。その光景を目の当たりにした子供たちは、パニックになりました。

その後、時間が経過してもショックは消えず、車の騒音や色々な騒音がトラウマとなり津波の音に聞こえて、なかなか勉強が手につかなかったそうです。

戸倉中学校

高台に位置しているので、避難場所となった戸倉中学校。

そこから見た光景は、津波の引き波で志津川湾の海底が見えたので、これはただ事ではねへ、山さへ避難したほうがいいのでは、そして、みんなが避難しました。

途中生徒が転んでしまい、先生が助けに行きましたが逃げ遅れ、先生と生徒の2名が津波の犠牲となりました。



高野会館 四階建

3月11日、その日は会館で老人会の演奏会が行われていました。多くの年配の方々が楽しんでる最中に地震が発生しました。

中にはすぐに家に戻ろうとした人もいましたが、会館の従業員はその場にとどまるよう説得しました。しかし何人かは説得に応じず、従業員の手を振り払って自宅へ戻ろうとし、自宅へ戻る途中に津波の犠牲となってしまいました。

残った方々330名は屋上へ避難し、命が救われました。

南三陸防災対策庁舎

3月11日 その日は防災の対策協議がおこなわれていました。庁舎には53名の関係者がいました。防災のために建設されたので頑丈に造られていました。

協議中に地震が発生したのですが、チリ地震の時は津波が6メートル、庁舎建物は12メートルだから大丈夫だと判断したそうです。しかし16メートルの津波がおしよせてきました。

防災職員として住民に高台への避難を防災無線機から最後まで呼びかけ続けた遠藤未希さんをはじめ、多くの方々が犠牲となりました。屋上のアンテナにつかまり続け、11名の命が助かりました。



鉄骨だけになった、南三陸
防災対策庁舎の前にて



雄勝病院跡地にて、Kさんのお話を聞

雄勝病院跡地にて

— Kさんのお話

雄勝病院のほとんどの患者が自分では動くことのできない状態だった。津波の被害を受けた方で、いまだ発見されていない方もいる。当時、医院長をはじめ職員全員が病院に残り、最後は屋上まで避難したが、津波の犠牲となってしまった。

Kさんは
亡くなった先生や看護婦さんは、よく逃げないで最後まで残った、凄いなって偉いな

この言葉を聞くと憤りを感じる。自分の命を犠牲にしてまでも何を守ったのか？

本来、看護師は消防士や自衛隊と違って自分を犠牲にして人の命を救う職務ではない。

しかし、いつの間にか看護師として働いていると自分が犠牲になっても患者を救わなければならない」という思いに駆られる。しかし、自分を犠牲にしてまでも何を守るのか？

例えば看護師の遺族が、亡くなった看護師は、自分を犠牲にして患者の命を救おうとしたのだから」と市や行政に対して賠償金を求める訴訟を起こし、裁判をしてそれが認められると「看護師という職務は自分を犠牲にしても患者を救わなければならない」という事を認めることになる。

ある看護師さんが病院の屋上まで逃げて、津波に流されたが

奇跡的に助かった。その看護師さんは「逃げたかただけど誰も逃げる」と言わなかった。本当は逃げたか」と話していた。

犠牲を美化し美談にしてはならない。尊い犠牲などない。あの時、生き残った人は今でも自分を責めている。

なぜ？自分が生き残ったのか
「死んだ人に申し訳ない」
Kさんは最後に語った。
「尊い犠牲ではなく、人の命を守るのぼついついどなのか、考えてほしい」と、死者からのメッセージとして受け止めている。



— 福島 の 声 —

福島県本宮市在住

渡辺 隼美

あの日原発が爆発しても私は
いまいんどんとなくどれだ
け危険なのかも知りませんで
した。テレビでも大丈夫だと言
っているし見えないし臭いも
しないしわからなかつたんです。

それが危険なものだと強く言
い出したのは主人の方でした。
とにかく遠くに行けと言われてま
した。逃げると言われても遠く
に親戚のないちには、体どこ
に行つていいのやら…。また2
歳半の娘を連れて知らないところ
に行く自信もなかつた家ですの
としていたことを選びました。

今思えばその選択が娘に初期
被爆をさせてしまった親として
は最大のミスでした。恐る恐る
暮らす福島での生活に光が見え
たのは、知り合いに教えてもら
った保養でした。ただその当時

はとにかく福島を離れられる！
それだけの思いでした。なので
行けば行くほど外のお母さんは
放射能について保養についてい
ろいろ知つていて私の無知さが
恥ずかしくなりました。

ある保養に参加したとき、娘の
おしこからセシウムが検出さ
れたことを知らされました。目の
前が真っ暗になりました。これか
らこの子はどうなってしまうん
だろうか？ ちゃんと大人にな
れるんだろうか？ 不安となぜ
あめとき逃げなかつたのかで自
分を責める日々でした。しばらく
カーテンをあけない生活が続き
ましたが、無事成長していく娘に
励まされ、また泊まりの仕事で娘
と離れる時間を持つことで心の
バランスを取つていたように思
えます。

そんな時、あるお母さんから教
えていただいたのが真行寺の青
空市場でした。市場にはたくさん
のお野菜とお母さんたちの笑顔
がありました。同じ思いでいる親

がたくさんいて頑張つているこ
とが私の励みになりました。今で
は市場のお手伝いもそこでお
しゃべりも私の気持ちを整える
大事な時間です。その市場も本年
度限りと言いつつことわざみしい
限りです。

震災から4年がたち、復興の言
葉ばかりが目立ちますが、まだま
だ福島は復興どころではないん
です。空間線量が立ち入り禁止区
域並みに高い場所もたくさんあ
ります。安心して外で子供を遊ば
せられる場所も少ないです。



池の平青空少年センターでの保養、交流会の様子

3月と5月、2回池の平でお
世話になりました。空気が澄ん
でいて安心して子供を遊ばせる
事ができました。お料理も安全
な食材で季節を感じる事が出
来るなんて本当に幸せでした。
福島から車で4時間走らせれば
こんな素晴らしいところに来れ
るんだ！ またそこに集まつて
頂いた皆さんとの楽しい席に時
間が過ぎるのがとても早かつた
です。こんな時間が長く続けば
いいのになあ、なんて思いまし
た。

皆さんに支えられていること
を羨し、日々の感謝の気持ちを
を忘れず毎日すこしていきたく
と思います。なにかあつたら震
災後知り合つたたくさん仲間
が助けてくれる！ 遠い親戚よ
りも深い絆。そう思える方たち
に出会えて今気持ちは軽くなり
ました。

高田教区 震災支援委員会レポート

☎A-KO(ぞくこう)48号より抜粋

— 福島の声 —

一 本松市在住

ハレシヤブト
渡邊美幸

東日本大震災から、もうじき4年が経とうとしています。福島をはじめ、被災地のことを今も忘れず応援してくださっている皆様、感謝の気持ちでいっぱいです。

震災当時、4歳だった長女と11ヶ月だった次女はそれぞれ8歳と4歳になりました。ある日、夕飯を食べていると

「ねえ ママ？ どうして津波がくる海の近くに原発をつくったんだろね？ みえくなら津波が絶対来ない山にこそるほどな」

と長女がおもむろに話し始めました。

「そっか、山につくるか…。
ちなみに、電気は原発でなくともつくれるんだよ」
わたしが答えると

「うそー！！！！！！ じゃあ、なんで危ないのに原発つくってんだろ。」

と口尖らせて言い、また夕飯を食べ始めました。

原発事故後、理由も理解できないまま色々なことを制限され我慢している子どもたち。改めて長女の発言に申し訳ない気持ちが増えました。それと同じくらい、長女が悩みながらも一生懸命考え、学び、精一杯生きていることを誇らしくも思いました。

「ゴールが見えない放射能汚染との戦い…。諦めそうになる気持ちに負けないよう、毎日子どもたちとたくさん笑って感謝の気持ちを忘れずに前を向いて歩いていきたいと思っています。」

ママは絶対諦めないぞ！！

高田教区 震災支援希望者レポート

『A-T-KO』44号より抜粋

ありがとう

福島県 本松市

真宗大谷派眞行寺坊主

佐々木 希

「お母さん、ありがとう！」

息子が言った。

「はっぺを真赤にして、

お目をまんまるにして

原発事故が起きたのは、1歳の誕生日を迎えたころ。
息子は自由に遊べる世界を知らない。

「お外に出てもいい？」

「この花、採ってもいい？」

「このお砂、触ってもいい？」

「ここ、放射能ない？」

汚染された環境が、
この子にとって当たり前前の世界。
制限だらけの生活が、
この子にとって当たり前前の日常。

疑いを知らない、いたずらな瞳で。

保養先の満開の桜の下で、
4歳になった息子が言った。

「お外に連れてきてくれて、ありがとう！」

「なんて悲しい、ありがとう。」

高田教区 震災支援希望者レポート

『A-T-KO』44号より抜粋



福島県二本松市で、子どもたちを守ることを選んだ、佐々木希さん

正会員・賛助会員・寄付者（敬称略・順不同）

2013年7月1日から2015年6月30日現在

恵光寺 勝男圭三・東弘寺・玉川静子・加藤誠・延岡潤照・明超寺・梶浦時子
常福寺 八田信雄・佐伯朋子・正蔵寺・平野喜之・土田慎二・井上知子・因宗寺 柏女有教
唯信寺・松野祐・光照寺・岩城芳文・大聖寺・宗善寺・増田一男・乗願寺 鈴木友好
正覚寺 山吹照之・勝善寺 井上孝昌・中野延子・照明寺 和田英昭・宗念寺
西岸寺 友松雅英・妙徳寺・光明寺 三浦仁・宮地修・孤野やよい・孤野秀存・福田忠
明覚寺・即得寺・宗泉寺 且保立子・秦秀人・田久敬吾・齋藤真治・横田洋・澤田恵子
斉藤操・森仁・大塚清・正應寺 佐々木誠正・飯塚久江・梅溪得文・新保トシ子・池田幸裕
阿弥陀寺・伊藤洋之助・光照寺 土肥真・大塚博孝・真行寺・平山範一・真福寺・(有)谷駒
雲国寺・山田和江・安田健二・勝願寺 井上証・小島森一・中村由美子・小島哲・樋崎菜々
徳因寺 稲垣直来・梁河文昌・野口隆・光了寺・正行寺・浄円寺・称念寺・青樹潤茂
小林ユキ子・智願寺・光円寺・桑原公認会計士事務所 桑原正信・恵光寺 門法会・田上翼
岩松知也・了因寺 門法会・専行寺(平松正信)・塩塚力也・石川真樹・永藤松男・西念寺
永藤貞江・了因寺 吉岡康裕・光林忠明・笹本伸一・本浄寺・中嶋正春・水 豊・吉田幸代
公益財団法人 全日本仏教会・瀬戸栄子・柏崎静恵・堤清志・白石政次・狛一・桑島かおり
円鏡寺・溝上国喜・岡田香澄・光照寺 池田孝郎・邨上真生・西連寺 白山勝久・大里幸三
光明寺 小林尚樹・宮武真人・兪漢子・深瀬将稔・一谷郁美・武部勝義・桑原正信・落合正
居酒屋 鶴・伊藤麻子・坂本スミ子・白石久子・齋藤ヤウ子・伊藤みちる・山中えりか
弘徳寺・増田宣夫・平塚秀男・スタジオ ポップヘアー・mio鍼灸整骨院・飯田正範
服部吉高・浄教寺 鈴木量心・明福寺・聖徳寺・託法寺・安楽寺・秋山弘一・忠網寺
専勝寺 碧海宏・諦聴寺・乗満寺 遠藤秀賢・通覚寺・永勝寺 田口壽人・江森信市
真照寺・利正寺・正恩寺・浄願寺・縁瑞寺 伊東隆雄・浄泉寺・大塚展彦・坂東性悦
西円寺・本誓寺・本多雅人・三木悟・徳蔵寺・峯崎賢亮・専西寺 青樹潤哉・長願寺
三池眞弓・妙安寺・幡谷正裕・常照寺・佑浩寺・江森光子・高德寺・吉田真樹子・近藤龍磨
加賀田晴美・宮地修・藤浪遊・見義智証・真宗大谷派 小松教務所・浄眞寺 前田義朗
長命寺・荒川保・教龍寺 藤本昌行・西光寺・相馬法道・渡辺久美子・橋本はる子
柿沼正男・羽部秀子・鈴木節子・井上ユキ・浄善寺・渡辺ウメ子・東出陸治・伊藤賢
飯田千恵子・山中なつ・秋津秀樹・安藤護・今泉徳夫・圓光寺・鈴木勝・新井淳也
山名広隆・岡安則子

*複数回ご協力頂いた方も記載は一回とさせていただきます。

皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます

ご芳名、団体名の誤字・脱字・記入漏れがありましたら何卒お許しください。

NPO 法人 災害ボランティアネット 収支報告書

期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日

前年度繰越金	¥1,663,696
収入総額	¥2,701,524
支出総額	¥2,878,511
差引残高	¥1,486,709
	次年度へ繰越

ありがとうございます

NPO 法人・災害ボランティアネットでは、皆様のご協力の元、毎月被災地へ身を運び、支援物資の運搬、炊き出し等の活動を続けております。

まだまだ復興という言葉からはほど遠い現地の状況の中、支援して下さっている皆様と共に、息の長い支援活動を続けていきたいと思っております。

これからも引き続きお力添えを頂けますよう、よろしく願い申し上げます。



今後、これから

震災から5年目、住宅再建や仕事などの経済的問題、暮らしてきた場や大切なものを失った喪失感や絶望感、さまざまな問題を抱え、今も困難な生活を強いられている。新潟中越沖地震では、被災者が震災から5年以上経過してから、自殺に追い込まれる人が半数50%に及んだといわれている。



津波で死んでしまったほうがよかったのではないかと考えてしまって眠れない時がある」
何度か耳にしてきたことば。

体、何が被災者を追い込んでいくのだろうか。家族、友人、家、お墓、風景、故郷、自分がほんとうに大切にしていたものがえのないものを失った「苦しみ」「悲しみ」は計り知れないものがあり、大切なものは、人ひとり違ふ。

今後も大事なことは被災者と信頼関係を築きながら苦しみや色々なその人の思いに耳をかたむけ「聞ききる」ことだと思ふ。食事をしながら自分の思いを語り、そして人に聞いてもらう。そんな場を開きつづけて創りつづけていきたいと思ふ。



ご協力をお願い

NPO法人「災害ボランティアネットワーク」は現在も東日本大震災によって傷ついた人々の支援活動を行っております。そしてその活動を支えてくださる「正会員」「賛助会員」も募集しております。

志のある方は、電話、ホームページからなどで一報ください。後日、詳細資料を送らせていただきます。

またご寄付も随時受け付けております。左の口座までよろしく願います。

振込先… ゆちょ銀行

加入者名… NPO法人

災害ボランティアネットワーク

口座番号… 00110-4-418730

編集後記

「忘れないでください」被災地での言葉だ。私はこれを何度もかみしめる。それは「震災」という事実、被災の事実、そこで生きていく人がいる事実、そして、今も生きようとしている人がいるという事実。

震災から4年が経過したが、その事実は変わっていない。しかし、送られてきた文章をまとめ、資料の中から写真を探すほどに、現地に行けない自分の現状が、歯がゆい。

結局自分は、自分の置かれた現状で、自分ができることをするしかないのか。

歯がゆい作業の中、言い訳を繰り返す。

文責 大内崇久